

⑫【2か年度(2年目)】安全な通学空間管理のDX実験(長野県伊那市)

1. 実験概要

自転車通学路空間の危険箇所をデジタル地図上でデータベースとして構築し、危険箇所の抽出と改良事業実施にいたるプロセスの迅速化を検証する。

2. 実験内容、実験結果

①データベースの構築

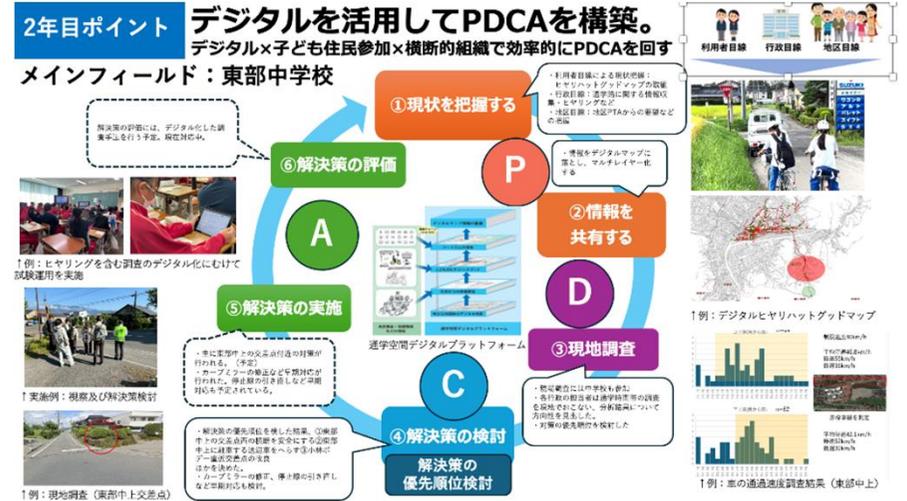
- ⇒利用者目線:ヒヤリハット・グッド・マップの作成デジタル化
- ⇒地区目線:危険性の高い地点、地区要望書をデジタルマップ化
- ⇒行政目線:事故データ、交通データ等のデジタルマップを更新

②データベースの活用法検証

- ⇒三つの目線のデジタルデータ積層、危険の見える化、対策立案

③合意形成による解決策の効果検証

- ⇒利用者目線:簡便なデジタルアンケート手法、リアルタイムモニタリングによる評価確立、とりまとめ
- ⇒地区目線:データベースを共有し地域協議会PDCAをまわし、より現実的なソフト対策を提案
- ⇒行政目線:地域住民との合意形成促進、安全教育への活用



3. 制度改革、マニュアル作成、全国展開に向けた提案

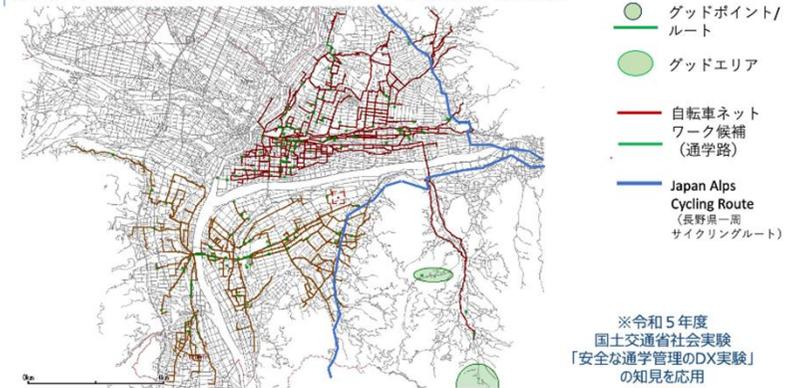
通学ヒヤリハットグッドマップ 第1フェーズ 初期準備

- 1) 対象校について情報を収集
- 2) 校区(通学範囲)の確認
- 3) 事故情報などの収集
- 4) 学校関係者との接触
- 5) 通学手段全体の理解を深める
- 6) 教育委員会に相談する
- 7) 警察に出向き、助言を求める

通学ヒヤリハットグッドマップ 第2フェーズ 実践開始

- 1) 現場を知る(歩く・乗る)
- 2) 通学の安全問題を調べる
- 3) 調査の提案書を作成する
- 4) 必須用品A0サイズ住宅地図
- 5) 校長先生、教頭先生と面談
- 6) iPadなどデバイス確認
- 7) 最初の調査はアナログで

応用: 通学路を活用した自転車ネットワーク形成の可能性※



取り組みの結果、走りやすく安全な通学路はDX管理しやすくなるため、本来の自転車ネットワーク形成に貢献する

※令和5年度
国土交通省社会実験
「安全な通学管理のDX実験」
の知見を応用

⑫【2か年度(2年目)】安全な通学空間管理のDX実験(長野県伊那市)

4. 意見と対応

有識者等からの意見	意見への対応
ヒヤリハット回答の品質アナログとデジタルの違いがある。ヒヤリハット調査回答の品質をどう担保するか？	1)母集団の特性を把握することがまず必要と考える。 2)母集団特性による回答の変化が存在するかみていきたい。あればAIを活用することでいまいな記述管理の可能性をみていきたい
送迎車両の路上駐停車問題駐車場は確保できるのか？	伊那公園を送迎場所として来年度(2025年4月)から保護者にアナウンスしていく。
事故情報更新ヒヤリハットグッドマップや事故情報などデータ更新はどう行なっているか	小学校は年一回通学路点検している。事故報告は警察から提供される(年一回)
汎用デジタルマップを利用した道路空間情報の重層化とその運用方法はどのように実施されるのか？	1. 通学路のデータをデジタル入力 2. 危険箇所見える化(デジタル積層) 3.対策の選択結果のモニタリング・評価 4.対策終了後のフィードバック
危険箇所対策危険箇所の優先順位をどうつけるか？	優先順位づけは主観(現場直感)と客観(タイムスタディ、速度計測、ヒヤリハット訴え、挙動センシング)により分析している。(傾向分析)
危険認識通学路の危険認識が大人と中学生とでずれる。どちらが正しいのか？	子供の安全が最優先。優れた対策計画があっても、完成を待つ間に子供が事故で亡くなる可能性があるため、即効性のある対策が重要。費用をかけずに早期に実施できる方法を真剣に考える必要がある。

5. 本格実施に向けた課題と対応方針

本格実施に向けた課題	課題への対応方針
地区要望調査書の更新・提出プロセスのデジタル化	デジタル機器経由の書類作成用のわかりやすいインターフェイスやマニュアルを作成
挙動デバイスによる生徒対象のリアルタイムモニタリング	挙動デバイスによるリアルタイムモニタリング被験者の対象を拡大し倍増させる
危険箇所の応急対策案の研究	海外を含む先進事例の情報収集と視察
他地域での横展開	伊那市の全中学校校区のヒヤリハットグッドマップデータベース構築をめざす。完成するとヒヤリハットグッドネットワークの他地域との連携につながる

6. 今後のスケジュール

